

を降りるところで嚴重な目かくしをされ、建物へ入ってから目かくしを取り外されるという嚴重警戒ぶりであった。

あるとき、ハルピンに御成中の「宮様」が第七三一部隊にひょっこり現われたことがあった。石井四郎部隊長が「関東軍司令官の許可なくして何人も立ち入る事を禁ず」の規定を楯にとり、門前でさんざん「宮様」を待たせ、もったいをつけたあげく、施設内に案内したエピソードは関係者の間に有名である。

石井四郎隊長（軍医中将）は、生体解剖を魅力ある「実験」として、興味を持つ日本人医学者に入隊を勧誘する「餌」とした。七三一隊員でありながら、当時ハルピン医科大学などの教壇に立った教授は少なくない。

「戦後の日本医学界に数かずの難手術をこなし高名を博し、某有名国立大学の教授として政府から勲章もらいはつた某氏……あの先生はなんぞそれほどの外科手術の技を身につけはつたんや。少ない難手術、もし失敗したら、えらいこつちや。そうですやろ。けど、あの先生にかぎつて失敗しはらへん。なんでや。前に何十回いう手

隊員が白い上衣を着て立っていた。隊員の一人が、短い言葉で少年に台の上へ上がるよう促した。

人間の「生き造り」

中国人少年は、命じられたとおり上半身裸になり、台の上に身を横たえた。

仰向けに寝た少年の口と鼻にクロロホルムを浸した脱脂綿が押し当てられ、麻酔がかけられた。中国人少年は、これから自分の身のうえになにが起こるかを理解していくなかつた。

下穿きを脱がせると、少年の性器にはほとんど陰毛がなかつた。大体において中国東北部の人びとは体毛が薄いのであるが、性器の形やその周辺からみて、少年の年齢は十二と十三歳ぐらいと見当がついた。

全身に麻酔が回ったころ、中国人少年の身体がアルコールで拭き清められた。

台を囲んだ田部班員の中から、K雇員が手にメスを握つて一步少年に近寄った。胸郭に沿つてY字型にメスが

術失敗の経験を持つてはる……どこでそないに経験積まはった。みんな七三一ですわ」

関西で出会った元隊員の一人は、「丸太」を相手に難

手術の「実験」が多数おこなわれたと語ってくれた。

「丸太」——それは人間であつて人間ではなかつた。「丸太」一体ごとに氏名の代わりに番号を打つた管理カードがあり、「丸太」が「消費」されるとその番号は新しい「丸太」の上につけ替えられた。

◇

だが、第七三一部隊が生体解剖をおこなったのは、こうした「反分子」だけではない。元隊員が当時目撃した一つの実例を書いておこう。

一九四三年のある日、解剖室に一人の中国人少年が連れこまれた。隊員らの話によると少年は「丸太」ではなく、どこから誘拐してきたのではないかというが、正確なことはわからない。

解剖室の片隅で、少年は観念したようにじつとうずくまつていた。

解剖台の周囲を、消毒した両腕を剥き出した十数人の

入る。コップヘル鉗子で止血された皮膚に血玉がブツブツとわき出て白い脂肪が露出した。生体解剖がはじまつた。「少年はマルタやない……子どもやから別に抗日運動をやつたわけではない。それを解剖したのは、健康な少年男子の臓器が欲しかったため、とあとでわかつた。少年はそれだけのために生きたまま腑分けされたんや……」のちにこの解剖光景を回想した元七三一隊員のことばかりである。

眠っている少年の体内から腸、脾臓、肝臓、腎臓、胃袋と手順よく各種の臓器が取り出され、一つずつ選り分けられてはバケツの中にどさり、どさりと投げこまれた。バケツの中に放り込まれた臓器は直ちに備え付けの大きなホルマリン液の入ったガラス容器に移され、蓋が閉まつた。

少年の体液にぬれてメスが光る。血泡の噴き出る中、K雇員の手ぎわよい「執刀」により、少年の下半身はほとんど空洞になつた。取り出されたある臓器は、ホルマリン液の中で、びくびくと盛んな収縮運動を繰り返した。「おい、まだ生きとるやないか……」

だれかがいった。人間の活き造りであった。

胃袋を取り、肺を切除したあとは、中国人少年の頭だけが残った。いが栗坊主の小さな頭である。それを湊班の一人が台に固定し、耳から鼻にかけて、横ヘメスを入れた。

頭皮が切り落とされたあと、鋸が入り、頭蓋骨が三角形に剥ぎ取られた。脳が露出したところで、隊員が柔らかな保護膜に手を突っこみ、少年の脳を取り出し、手早くホルマリン容器の中に入れた。台の上には少年の四肢と空洞になった身体の形骸だけが残った。これで解剖は終わった――。

「持つていけ」

少年の臓器を入れたホルマリン容器を、待機していた別の隊員がつぎつぎと持ち去った。少年の強制された死に一掬の感傷も寄せられなかつた。それは処刑ですらなかつた。悪魔の食膳に供せられた一体の肉にすぎなかつたのである。

隊員が廊下を歩くと両手の中でガラス容器がゆれ、タブタブと音を立てて臓器が収縮した。かなり重いその容

器を、隊員たちは落とさないよう、全身に力を入れてゆっくりと捧げ歩いた……。 ◇

おそらく思春期の門口に立っていたであろうこの中国人少年の名は多数の「丸太」同様にまだわからぬ。少年は自分が生きながら解剖されていることを、知る由もなかつた。少年に強制されたわずかなまどろみのうちにすべてが完了したのである。

突然、行方不明になつたままついに帰つてこなかつた少年について、中国人の親たちはさぞ嘆き悲しんだことであろう。

少年には姉や妹はいなかつたのだろうか。彼には受け持つていた労働もあり、くちびるには口ずさむべき歌もあつただろう。

生きていればその将来に多数の出会いがあり、どんな可能性の花を開いたかもわからない。まどろみのうちにホルマリン液に浸された少年の脳は、収縮の合間になかつた夢らしきものでもみたのであらうか。

◇

元隊員たちの回想によれば、第七三一部隊には、時折わけのわからぬ『捕虜』が移送されてきた。解体された少年はその一例である。

ほかに「ヨーロッパ系の外国人」が一人、特設監獄にいるという風評が隊員の間に流れていた。

第七三一部隊は、対ソ作戦とともに米国にたいしても細菌戦を実行する計画を持っていた。そこから、この外人がアメリカ人であるという推測も生まれた。いや、日本軍が上海で捕えたイギリス人であるという話もあつた。太平洋戦争の過程で東南アジアで捕われの身となつたオランダ人である、ともいわれた。

生産したペスト・ノミが「あっちのほうの毛唐にも効くかどうか」の実験が、この外人を待つていたといふ。

剖検メモの告発

剖検番号（記入なし）

性
♂

年齢 | | (記入なし)
職業 | | ()
出処 | | ()
明) 時四十分

剖検 同月同日同時

臨床診断 ○急性細菌性心内膜○○ (三字不明)

執刀者 | | (記入なし)

記録者 | | (記入なし)

病理解剖診断

一副脾淋巴○ (一字不明) 脿張

二脾腫大及鬱血

三副腎鬱血及腎実質変性竝鬱血腫大及肝腫大
(行外に横書きで)

左肺及右肺下葉半部結核症 (浸潤認)
(縦書きで)

甲状腺腫張
睞丸腫張

(行外に横書きで)